

活用型の変化から見た上方絵入狂言本：ラ行下二段 活用の四段化の場合

山県, 浩
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/10502>

出版情報：文献探究. 11, pp.61-85, 1983-03-15. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

活用型の変化から見た上方絵入狂言本

—ラ行下二段活用 of 四段化の場合—

山県浩

一、はじめに

(1) 近世語研究の中で、歌舞伎脚本本資料（絵入狂言本・絵入根本・台帳など）に関する研究は未発達の状態にある。近世語資料としてこれを用いた研究は幾らか見えるが、本来先になされるべき、そのことばの性格を検討した研究は殆ど見出せない。

このような状況の中で、本稿は、歌舞伎脚本本研究の第一段階として、特に、上方の絵入狂言本を採り上げ、その言語（口語）資料としての性格を明らかにしようとするものの一つである。

ここでは、その性格を考える現象として、次の拙稿に引き続き、ラ行下二段活用 of 四段化を扱う。たゞ、本稿は、活用型の変化現象による一連の検討の締め括りにあたるため、この現象だけにとうわれず、上方絵入狂言本の資料性を述べてゆきたい。

①、活用型の変化から見た上方絵入狂言本

—二段活用 of 一段化の場合—

（『語文研究』52・53）

②、活用型の変化から見た上方絵入狂言本

—ラ行下二段活用 of 四段化の場合—

（『文献探究』10）

(2) 本稿で扱う上方絵入狂言本は、これまでと同じく、元禄・享保期に刊行された30種で、比較資料としては、近松世話物浄瑠璃17種・上方板洒落本14種を採り上げた。

具体的には、次の如くであるが、その詳細やテキスト等については、拙稿①②を参照のこと。

〔以下、拙稿①・拙稿②と略記する。〕

『上方絵入狂言本』

- ①慶 大隈川源左衛門
- ②大 大隈川源左衛門
- ③大 大隈川源左衛門
- ④大 大隈川源左衛門
- ⑤大 大隈川源左衛門
- ⑥大 大隈川源左衛門
- ⑦大 大隈川源左衛門
- ⑧大 大隈川源左衛門
- ⑨大 大隈川源左衛門
- ⑩大 大隈川源左衛門
- ⑪大 大隈川源左衛門
- ⑫大 大隈川源左衛門
- ⑬大 大隈川源左衛門
- ⑭大 大隈川源左衛門
- ⑮大 大隈川源左衛門
- ⑯大 大隈川源左衛門
- ⑰大 大隈川源左衛門
- ⑱大 大隈川源左衛門
- ⑲大 大隈川源左衛門
- ⑳大 大隈川源左衛門
- ㉑大 大隈川源左衛門
- ㉒大 大隈川源左衛門
- ㉓大 大隈川源左衛門
- ㉔大 大隈川源左衛門
- ㉕大 大隈川源左衛門
- ㉖大 大隈川源左衛門
- ㉗大 大隈川源左衛門
- ㉘大 大隈川源左衛門
- ㉙大 大隈川源左衛門
- ㉚大 大隈川源左衛門
- ㉛大 大隈川源左衛門
- ㉜大 大隈川源左衛門
- ㉝大 大隈川源左衛門
- ㉞大 大隈川源左衛門
- ㉟大 大隈川源左衛門
- ㊱大 大隈川源左衛門
- ㊲大 大隈川源左衛門
- ㊳大 大隈川源左衛門
- ㊴大 大隈川源左衛門
- ㊵大 大隈川源左衛門
- ㊶大 大隈川源左衛門
- ㊷大 大隈川源左衛門
- ㊸大 大隈川源左衛門
- ㊹大 大隈川源左衛門
- ㊺大 大隈川源左衛門
- ㊻大 大隈川源左衛門
- ㊼大 大隈川源左衛門
- ㊽大 大隈川源左衛門
- ㊾大 大隈川源左衛門
- ㊿大 大隈川源左衛門

⑧大・大経師昔磨

⑨山崎与次兵衛寿の門松

⑩網・心中天の網島

⑪上方板洒落本

⑫穿・穿当珍話

⑬陽・陽台纏編・耻聞秘言

⑭聖・聖遊那

⑮風・風流襟人形

⑯北・北華通情

⑰阿・阿蘭陀鏡

⑱鐘・鐘の権三重障子

⑲博・博多小女郎波枕

⑳置・心中宮庚申

㉑清・清神秘録

㉒月・月花余情

㉓新・新月花余情

㉔野・野中奇譚(異本)

㉕短・短葉志葉

㉖醉・酔の筋書

㉗う・うかれ草紙

㉘十・十界和尚話

▽上方板洒落本は、概ね現在刊行中の「洒落本大成」を使用し

た(但し、⑬清のみ、梳篦石十種も之によった)。

尚、以下すべて、上方檢入狂言本は「狂言本」、近松世話物浄瑠璃は「近松浄瑠璃」、上方板洒落本は「洒落本」と略記する。

二. ラ行下二段活用四段化

(1)本稿で問題とするラ行下二段語は、「シャルル」、「ナサルル」、「メサルル」、「下サルル」、「オッシャルル」の五つの敬語である。

近世前期上方語におけるこれらのラ行下二段語の四段化については、後掲の湯沢幸吉郎氏・坂梨隆三氏の著書・論文が詳しい。特に、坂梨氏の御研究は、狂言記・近松浄瑠璃などを扱われた精緻なもので、当期の四段化に関する問題は概ね解決されたように思われる。

本稿でも、用例の扱い方が異なる等の理由で、近松浄瑠璃17種を改めて調査したが、不備な点が多く、坂梨氏の御研究に負う所が大

きかった。

▽参考文献^{注2)}

①湯沢幸吉郎「徳川時代言語の研究」

②坂梨隆三「ラ行下二段活用四段化」

(以下、文献④・文献⑤と略記する。)

(2)活用型の変化現象を資料性等の検討に用いることの難しさは、拙稿①②でも述べたが、ラ行の四段化にはそれ以外に様々な問題が存する。

こゝでは、特に次の如き点を示すが、これらはいずれも対象とする語が特定少数の敬語であることに原因が求められる。たゞ、いずれの場合も、注意を払えば、論を進める上で支障になることはない。

(i)資料・文体によって語の現われ方が異なる。

(ii)対象となる五つの語は、別々の性格・歴史を持っている。

(iii)非変化形と変化形とが、ある待遇差を持って使い分けられる可能性が存する。

(2)①が問題となるのは、非変化形対変化形という対立の外に、語の有無という対立が存することになるためである。

具体的には次の如き出現の偏りを示すが、①を除けば、検討に差し障る所は小さい。

①五語とも、地文には殆ど見えない。

②狂言本・近松浄瑠璃では、五語とも、遊女など、遊里関係の女

性に少ない。

① 狂言本・近松浄瑠璃では、「メサルル」は、男性、特に武士層に多い。

② 洒落本には「メサルル」の例が極めて少ない。

二段活用の一段化・サ行の四段化いずれでも、狂言本の地文での変化形の多さが、その特徴の一つであった。しかし、①のため、本稿では会話文だけの検討しか行なえず、狂言本の全体的な性格の把握は不可能となる。

尚、④は、地文が会話文ほど多くの敬語を必要とせず、また、こゝで扱ふ敬語を記せるほど口語的でないため生じた現象と考えられる。⁽³⁾

(22) (ii) は、対象となる敬語が個々に持っている性格・歴史とその四段化とは無関係でないため、安易にラ行下二段語として一括してはならないということである。

他の活用型の変化現象でもこのことは考慮されるべきであるが、こゝで特に問題となるのは、二段活用語などと異なり、対象とする語が僅か五種にすぎず、語種の多さで各々の個性を中和して一般化することが難しいためである。

結局、(ii) は、ラ行下二段の四段化として一般化できる面と各語の持つ個性との張り合いの問題となろう。

(23) (iii) の如く、非変化形と変化形とが、ある傾向性を持って使い分けられることは、二段活用の一段化でも認められる（坂梨隆三氏の「国語と国文学」4710の論文が詳しい）。

同じことが、ラ行の四段化でも考えられるが、特に、対象となる語が、使用頻度の高く、語種の少ない敬語であることから、その使い分け意識は一層明確なものであろう。更に、この使い分けが待遇差の表現のために口頭語での変化状態を無視して行なわれることも十分予測される訳で、この場合には、拙稿①②の如き両語形の使用比率による検討などは、無意味なものになってしまう。

二ノ一、内部差

(1) 狂言本間での四段化の違いを見るため、別表1に30種ごとの用例数を示した。

ところが、ごく一部を除き、各語のどの活用形も、下二段形の四段形一辺倒という特殊な状態で、両形の適当な拮抗は見られない。このため、和暦を規準に用例をまとめても、有意な内部差は認められない。たゞ、下接辞の違いなどまでに分析してみると、次の如き対立が認められる（いずれも、会話文の場合）。

① 「シャルル」

④ 推量辞「ウ」下接

元禄前期Ⅱ下二段形(④運・ノ例)

元禄後期Ⅱ四段形(④福・④至・各ノ例)

⑤ 丁寧辞「マス」下接

元禄前期Ⅱ下二段形(⑤運・ノ例)

元禄後期以降Ⅱ四段形(⑤浦)以下、5種に12例)

②「ナサルル」

○命令形

元禄前期⇨下二段形有(①隱) 以下、3種に4例、㊦四段形6例)

元禄後期以降⇨下二段形稀(①慶)ノ例、㊦四段形54例)

③「メサルル」

○命令形

元禄前期⇨下二段形(②繩)ノ例)

元禄後期以降⇨四段形(①浦) 以下、7種に7例)

④禁止辞「ナ」下接

元禄後期⇨下二段形(①浦)・①奈)各ノ例)

宝永期⇨四段形(①日)ノ例)

④「下サルル」

④「タ」・「マス」下接

元禄前期⇨四段形無(下二段形⇨ハタ)ノ例、ハマス)11例)

元禄後期以降⇨四段形有(四段形⇨ハタ)2例、ハマス)2例、㊦下二段形⇨ハタ)6例、ハマス)6例)

例、㊦下二段形⇨ハタ)6例、ハマス)6例)

④終止連体形

元禄前期⇨四段形無(下二段形4例)

元禄後期以降⇨四段形有(①浦) 以下、3種に3例、㊦下二段形13例)

▽元禄前期とは、元禄元々8年、元禄後期とは、元禄9々16年を意味する。

を意味する。

(2)対立をなす一方の用例がノ例であったり、個々の信頼度は高くないが、全体的には一貫性があり、概ね「元禄前期対元禄後期以降」という大きな対立が認められ、元禄前期の狂言本に、下二段形が目立ち、四段形が少ない。

この対立は、二段活用的一段化・サ行下二段の四段化でも見られるので、これが偶然の結果でないことは明らかである。

尚、この会話文での対立は、拙稿②で述べた如く、口頭語での四段化の進行の反映ではなく、元禄前期狂言本がその初期性ゆえに他のものに比べて幾らか文語的であったため生じたものと考えられる。(2)そう言えば、表などで「保留」の欄におさめた「ベシ」下接例は、19例中14例までが元禄前期狂言本に集中している(表(1)参照)。

「ベシ」については、文献④(ペ405)などが詳しいが、元禄前期狂言本におけるこの接辞の多用は、その文語的な性格の現われと言える。

①百姓作介(国主)「タガほ村の作介と申さのにて候、寺にちつじなく候間、すへて下さるべし。」

(3)個々の狂言本の問題になると、用例の関係で難しいが、①慶は少し特徴的な現象を示している。

表(1)

語形資料	ナサルベシ	下サルベシ	メサルベシ
元禄前期 5種①-⑤	1	12	1
元禄後期 10種⑥-⑱			
宝永期 4種⑲-⑳	1	2	
正徳期 2種㉑-㉒	1	1	
享保期 9種㉓-㉔			

▷赤で会話文の用例、
▷空欄は、用例0を示す。

この狂言本は、元禄後期以降のものとしては珍しく、下二段の命令形を多く有している(「シヤレヨ」「ナ

サレヨ」「下サレヨ」各ノ例、その他に、「下サルベシ」ノ例)。中でも、「シャルレ」は30種中こゝだけ、「ナサレヨ」は元禄前期狂言本とこゝだけで、用例こそノ例ヅゝではあるが、見過すことの出来ない現象である。

命令形については再度述べるが、これも文語的な形の多用ということになる。たゞ、②(巖)の場合は、「都太夫一中の正本を抄出した狂言本である」(翻刻本解題p19)の如く、浄瑠璃の正本と関係を持つことが、このような現象の一因ではなからうか。

②手代徳兵衛(隠居孫太郎)「はて今ではない。より／＼いふておかしやれよ。……」
 ②(巖)七ノ十ウ

二、二、全体相

(1)敬語ごこの四段化の傾向を把握するため、元禄享保期の狂言本30種の用例を一括して検討を加える。

前述の如く、資料間の差は僅かなものにすぎないため、用例をまとめても問題は殆どない。

(1)敬語ごこに主な活用形の四段化の進み具合をみると、次の如き差が認められる(表(2)参照)。

- ①「シャルレ」(連用形・終止連体形・命令形対未然形)
- ②「ナサルレ」(命令形対未然形・連用形・終止連体形)
- ③「メサルレ」(命令形)
- ④「下サルレ」(命令形対終止連体形対連用形対未然形)

表(2) 狂言本30種における行下二段の四段化(会話文)

語	未然形		連用形		終止連体形		已然形		命令形		その他		計	四	保留	
	下二	四	下二	四	下二	四	下二	四	下二	四	下二	四				
シャルレ	12	2	1	59		67		1	1	41		11	14	181		
ナサルレ	25		327	(2)		73			5	60	17		447	60	5	
メサルレ	1		1		1				1	7	2	1	6	8	1	
下サルレ	7		96	(1)	4	17	3	1	5	91	3	2	129	(1)	100	15
オッサルレ	1	2		27		21			2	1	1	1	2	53		

□()内は、地文の用例数、空欄は用例0を示す。

⑤「オッサルレ」(連用形・終止連体形対未然形)
 ▽用例が2例の活用形、下接辞の問題となる「その他」には、言及しなかった。
 語ごこに進み具合が異なるが、この時点では、命令形・終止連体形・連用形・未然形ノの順で四段化が進んでいるとまとめることができる。

語によって、これまでの進み方、これからの進み方が異なるかもしれず、また、終止連体形と連用形との先後関係は唯一「下サルレ」の状態によるなど、右の順序は等差的でない……、このように並べることに問題がない訳ではない。しかし、狂言本の時点で、右の如くまとめて進度を示し得るといふことは、語こそ違うが、そこに共通した進み方の傾向性が存しているよである。

(2)下接辞による四段化の違いは、用例数の関係で難しいが、一部に傾向らしいものが見られる(別表IV参照)。

例えば、「シャルル」の場合、否定辞「ヌ」は、//例すべてが下二段形に下接している。一方、同じ未然形下接でも、推量辞「ウ」になると四段形に下接する例が見られる（下二段下接/例、四段下接/例）。

拙稿②（p.50注⑨）でも述べたが、活用型の変化と下接辞との関係には、いろんな問題があつて難しい。特に、右の如く、同じ活用形に下接し、ほぼ同じ口語度のものどうしの間には差が見える場合には、説明が非常に困難である^{注⑨}。

(3)敬語ごとに四段化の状態をみると、ハシャルル||オツシャルル・下サルル・ナサルル∨の順で四段化が進んでいる（表②参照）。用例の少ない「メサルル」は除いた。

具体的には、「シャルル」「オツシャルル」で下二段がまごまつて見えるのは未然形程度であるが、「ナサルル」で四段化が生じているのは命令形にすぎず、「下サルル」は両者の中間に位置している。

ところで、このように並べると、同一条件下での四段化のしやすさの違いのように見える。しかし、実際は、個々の性格・歴史の違いを反映したもので、ハ使役辞「スル」と「サスル」との四段化の違い∨などは性格を全く異にしている。

(4)その他、使用者ごとの四段化の違いなどについても検討したが、変化状態の特殊性もあつて、特記すべき現象は認められない。

例えば、用例数は示さないが、男女の違いをみても、サ行の四段化と同じく、四段化の有意な差は見出せない。

また、下二段形と四段形との使い分けも、命令形を除けば、同じ活用形で両形が拮抗していないことなどのため、検討しがたく、更には、見出せそうにない。

尚、「ナサルル」「下サルル」は地文での例を僅かに持つが（2例・/例）、すべて下二段のまゝである。

(4)命令形には下二段形が幾らか存するが、これは口頭語の反映ではなく、作者に意図されたもの、ようである。

一般的に言つて、命令形の性格は他の活用形のそれとは異なつており、従来から「主観的表現の語句」「辞的性情を持つ^{注⑩}」などと言われている。更に、敬語になると、普通動詞に比べて命令形が良く用いられること^{注⑩}から、その特性と相俟つて、その存在は非常に意識されやすかつたと考えられる。

このような命令形において、表②の如きハ四段形||多数・下二段形||稀∨という状態や、下二段形||例すべてが「ヨ」の形をとること^{注⑩}、これらの例が特定の狂言本（元禄前期の4種と④）^{注⑩}・但し、「下サレヨ」は他に⑤⑥・⑦⑧に/例づゝに集中していることなどからすると、下二段・命令形は、何か意図された存在ではないかと思われくる。更に、個々の用例をみると、用例③④の如く、下二段の命令形は改まった物言いに用いられることが多い。

従つて、下二段・命令形は、口語的写実性の低い特定の狂言本において、特別な表現効果をねらつて作られた語形と言へる。

このため、下二段形と四段形とを、他の活用形では活用型の変化の問題として扱えるが、命令形では語彙の問題として扱われるべき

であろう。

③ひろせぎやうぶ(内大臣みちなり)「あ、おかしい事、其いちごんわすれ給ふな、玉を取あげ奉らずば、それかしいけておくべからず、よつくしあんめされよ。」
 ④まいまいいもせ(下人喜作)「どなたかは存せぬ共、何とぞ一所へ、何事も私しだいにござれよ。」
 ⑤下二段の終止連体形・已然形には、四段化の外に一段化の可能性もある。

一段化については、拙稿ので述べたが、本稿で扱っている敬語では、「下サルル」の終止連体形に一段化例が/例(④江)に見えるにすぎない。

三、他種の資料との比較

(1)比較資料とした近松浄瑠璃については、文献⑥、坂梨隆三氏の詳細な調査(但し、「シャルル」「オッサルル」は除く)があるが、用例の処理の異なる所があるため、別表Ⅱの如く改めて調査を行った。

たゞ、それには、坂梨氏の調査結果と大きく異なる点が見られるため、筆着の調査で不十分な所をそれで補いながら狂言本との比較を行なつてゆく。

洒落本についても調査したが(別表Ⅲ)、その刊行は宝暦期以降で、登場人物も特殊な者が多い。また、調査資料の少なさ等の理由

で、その四段化の全体相は把握しにくい。そこで、洒落本は専ら四段化の進度での比較に用いることにした。

(1)近松浄瑠璃には、狂言本の如き内部差さえ認められないため、最初から用例を一括して検討を加える(表(3)参照)。

敬語ごとに主な活用形の四段化の進度をみると、次の如くで、これらは先の狂言本の状態と概ね一致する。

表(3) 近松浄瑠璃17種におけるラ行下二段の四段化 (会話文)

活用形	未然形		連用形		終止連体形		已然形		命令形		その他		計	保留	
	下二	四	下二	四	下二	四	下二	四	下二	四	下二	四			
シャルル	2	1		5		14				42	1	9	3	71	2
ナサルル	25		85	1	30		4		1	39	10		155	40	2
メサルル	3		2	5	1					10	1	2	7	17	
下サルル	5		25 (1)	4	4	7	1		1	99	3	9	39 (1)	119	4
オッサルル			2		1	4					1	2	4	6	1

△()内は、地文の用例数、空欄は用例0を示す。

- ①「シャルル」||「連用形・終止連体形・命令形」対
 - ②「ナサルル」||「命令形・未然形」対
 - ③「メサルル」||「命令形・連用形」対
 - ④「下サルル」||「命令形・終止連体形」対
 - ⑤「オッサルル」||「終止連体形」対
- ▽用例が/2例の活用形・「その他」には、言及しなかつた。

語ごとに四段化の状態は異なるが、一括した時の活用形の先後関係は、八命令形・終止連体形・連用形・未然形への順で四段化が進んでいるとなる。

つまり、狂言本と近松浄瑠璃とは、敬語ごとでも、また、一括しても、活用形間の四段化の遅速は同じ傾向を示しているのである。

尚、右の如く活用形が並ぶのは、狂言本・近松浄瑠璃の時点での偶然の結果ではなく、必然性を持った現象と考えられる^{注(4)}。

(1)命令形の四段化が早かったのは、文献④(ペ52・53)の如く、その変化が語尾「ヨ・イ」の脱落ですむという、変化の容易さのためである。

たゞ、ごく初期の段階では、この脱落は四段化と関係のない下二段語に一般的な現象であつたと考えられる(文献④ペ113・文献⑥ペ53)。

(2)終止連体形については、坂梨氏が「ヨルル↓ヨルル」の例を採り上げ、「これは終止連体形に独自に存する四段化への潜在的な力と見ることができると」(文献⑥ペ52)とされ、命令形と同じ、四段化と直接関係のない語尾「ル」の脱落を考えていらつしやる^{注(4)}。或は、この語尾の自然脱落が、終止連体形の四段化を未然形・連用形のそれより進める一因になつていたかもしれない。

その他に、終止連体形と未然形・連用形との活用形としての独立性の違いが四段化の遅速に関係していたかもしれない。つまり、終止連体形は下接辞(の語)との接合の緩やかなことが多いため^{注(4)}、新しい活用への変化に抵抗が少なかった。……この考え方には、言い放

つ形の命令形で著しく四段化が進んでいたことも説明できる。

(3)未然形と連用形との差については、今の所、明解な説明をしえない。

注(4)で述べた如く、この二つの活用形の場合には、下接辞からの検討が必要であらう。

(2)下接辞による四段化の違いは、近松浄瑠璃の場合も用例数の関係で難しいが、否定辞「ヌ」の下二段下接の傾向は認められる。

狂言本と同じく、「シヤルル」の例であるが、否定辞は下二段形にのみ下接している(未然形全3例、「シヤレヌ」2例、「シヤラバ」例)。

その他、近松浄瑠璃だけの現象であるが、「ンス」(「マス」の転)、「ヤス」など、遊里詞が四段形に下接する傾向が見られる。特に前者は、「ナサルル」の連用形で唯一の四段形に下接している。

(「マス」は「下サルル」に下接。詳しくは、別表IVを参照のこと)。

⑤遊女松風(山本森右衛門)「どうござんすぞ かねのことハ存やせぬ やり手におといなさりんせ」^{出典}・影印本ペ88

(3)敬語ごとの四段化の状態をみると、近松浄瑠璃ではハシヤルル・メサルル・下サルル・ナサルルへの順で四段化が進んでいる(表③参照。用例の少ない「オツシヤルル」は除いた)。

筆者の調査では、「メサルル」と「下サルル」との差が微妙であつたが、坂梨氏の調査を参考に右の如く定めた。

(3)こゝで、狂言本の状態と比べると、両者はほぼ同一の傾向にあり、ハシヤルル(オツシヤルル)・(メサルル)・下サルル・ナサルルへ

の順で四段化が進んでいるとまとめることができる。

用例数の関係で、狂言本では「メサルル」、近松浄瑠璃では「オッシャルル」の位置を定められなかったため、一方の資料による位置を()に入れて示した。しかし、除外したもので、そこに見える用例を判断すると、二つとも右の()の位置から大きく外れることはない。

また、理論的に、五つがこのような順序で並ぶことは、不自然ではないようである。

(31)例えば、「シャルル」「オッシャルル」で四段化が最も進んでいたのは、これらが単に「動詞十(三)ルル」の一語化によって成立したものでなく、「サセラルル」・「仰セラルル」(の)「仰セアルル」からの語形変化を経たものであるためと考えられる。

つまり、変化形をとることで、全く新しい一語と認識され、「(助)動詞十(三)ルル」という意識が薄弱になれば、下二段活用に固執するかも弱まり、新しい活用への変化は容易に進行しよう。

(32)同一の語構成をまつ語の間でも、その敬語としての成立からある時点までの使い込まれてきた程度(累積的な使用頻度)が違えば、「動詞十(三)ルル」の原形意識やラ行四段動詞との接触回数なども異なってきた。自ら四段化の進度も違ってくるよう。

すると、すでに蒙求抄など抄物から例が見える「メサルル」「下サルル」と、キリシタン資料の例を古しとする「ナサルル」との、狂言本・近松浄瑠璃までの使用頻度の差は歴然としており、そこに四段化の差が見えることは、当然と言える。

ほぼ同じ歴史をまつ「メサルル」と「下サルル」との差は難しいが、前者が「スル」の意で敬語の中でも主流を成していたため、短期間に集中して用いられたとすれば、その成立から狂言本・近松浄瑠璃までの累積的な使用頻度は違ってくる訳で、四段化の差も当然生じてこよう。

「メサルル」の語史について詳述する余地はないが、それが狂言本・近松浄瑠璃では、敬意が低く、限られた階層でしか用いられず、洒落本ではその例が殆ど見出せないという衰退状況からすると、「下サルル」とは比較にならないほど使い込まれてきたことは明らかである。

尚、「シャルル」「オッシャルル」の四段化にも、語形変化の力に比べれば弱い。累積的な使用頻度は関係してこよう。

(33)以上のことから、これまで何度か述べてきた各敬語の性格・歴史と四段化との関係とは、その時点で敬語が個々にもつ語形変化の有無へ累積的な使用頻度の高低という四段化促進条件の満たし方と言い替えることができる。

(4)その他、近松浄瑠璃には、男女差に対応する四段化の違いも、地文での四段化例も、狂言本と同じく認められない。

また、調査した17種の限りでは、どの語にも一段化例は見られなかった。

(5)以上の如く、ラ行下二段の四段化に関して狂言本は近松浄瑠璃とほぼ同一の変化の傾向性を有していた。このことは、偶然の文章(の文体)的一致とも言えるが、両者が共通して当時の口頭語に依拠

表(4) ラ行下二段の四段化 (会話文)

語	資料	活用形		連用形		終止体形		已然形		命令形		その他		計		保留
		下二	四	下二	四	下二	四	下二	四	下二	四	下二	四	下二	四	
シヤルル	狂言本 15種①-⑮	6	1 (16.3)	29		25		1	1	14 (93.3)		2	7	72 (91.1)		
	近松浄瑠璃 17種①-⑰	2	1 (33.3)	5		14				42 (100)		1	9	3 (95.9)	2	
	洒落本 14種①-⑭		1 (100)	4						7 (100)				12 (100)		
ナサルル	狂言本	16	(0)	184	(0)	40	(0)		1	40 (97.6)		8	249	40 (13.2)	3	
	近松浄瑠璃	25	(0)	85	(1.2)	30	(0)	4	1	39 (97.5)	10		155	40 (20.5)	2	
	洒落本	5	13 (72.2)	22	39 (63.9)	25	(100)			53 (100)		1	27	131 (82.9)	1	
メサルル	狂言本									5 (100)		1		6 (100)		
	近松浄瑠璃	3	(0)	2	5 (76.9)	1	(0)			10 (100)	1	2	7	17 (96.4)		
	洒落本									1 (100)				1 (100)		
下サルル	狂言本	5	(0)	38	4 (9.5)	11	1 (2.3)	1		3	40 (93.0)			58	45 (82.9)	3
	近松浄瑠璃	5	(0)	25	4 (12.8)	4	7 (62.6)	1	1	99 (97.0)	3	9	39	119 (99.8)	4	
	洒落本	1	(0)	3	14 (82.4)					4 (100)			4	18 (81.8)		
オツシヤルル	狂言本	1	2 (66.7)	16	(100)	15	(100)			1 (100)	1	1	2	35 (96.4)		
	近松浄瑠璃			2	(0)	1	4 (90.0)					1	2	4	6 (60.0)	1
	洒落本		1 (100)	3	(100)	8	(100)							12 (100)		

▷()内の数値は、四段化率(四段形÷(下二段形+四段形)×100の値)である。

▷空欄は、用例0を示す。

(51)敬語ごとに、近松浄瑠璃とほぼ同時期の狂言本15種(①至⑮津)について、近松浄瑠璃・洒落本と比較すると、表(4)の如くである。

(52)狂言本と近松浄瑠璃とでは、どの敬語のどの活用形において、四段化は概ね同一の進行状況にある。

若干差の見える箇所もあるが、両資料の主な登場人物の階層の違いや用例数の少ななどを勘案すると、問題にはならないであろう。

(53)洒落本の進度は、狂言本・近松浄瑠璃のそれを進行させたもので、特に「ナサルル」「下サルル」での四段化の進み方は著しい。

これは、狂言本・近松浄瑠璃と洒落本との時代差を適当に反映した結果と言える。

(54)先の変化の傾向性や、この四段化の進度による比較から判断すると、ラ行下二段活用の四段化に関して、狂言本は近世の上方語資料として近松浄瑠璃と同程度当時の口頭語を反映していると言つことができる。

(55)これは、変化の傾向性という点では問題ないが、変化の進度の点で、拙稿②の結果と異なる。

それである。

そこで、四段化は口語性の指標であることから、四段化の進度で狂言本と近松浄瑠璃・洒落本とを比較すると、狂言本の口頭語との相対的な距離を知ることができる。

した上で的一致と考える方が妥当であろう。

更に、両資料から30年以上も後の洒落本の四段化の傾向は、狂言本・近松浄瑠璃の傾向の延長線上にあるものではない。これによつても、狂言本などと近世上方の口頭語との関連は、否定しがたいように思

られる。

そこで、四段化は口語性の指標であることから、四段化の進度で狂言本と近松浄瑠璃・洒落本とを比較すると、狂言本の口頭語との相対的な距離を知ることができる。

即ち、狂言本の状態は、拙稿①・二段活用的一段化では、近松浄瑠璃と傾向性・進度いずれの点でも一致していたが、拙稿②・サ行下二段の四段化では、傾向性の点ではともかく、進度の点で異なっていた。同じ下二段活用の四段化であるため、ラ行の四段化でも、サ行の四段化と同じく、狂言本の方が近松浄瑠璃より四段化の進んでいることが妥当なように思われる。

(22) このような相違は、口頭語におけるラ行の四段化とサ行の四段化との進み具合が異なっていたこと、狂言本と近松浄瑠璃との反省的意識の強さが異なっていたことが複合したため生じた現象と考えられる。

サ行の四段化が、狂言本では進み、近松浄瑠璃で抑制されていたのは、後者の方の反省的意識が強かった所に、当時の口頭語で四段化がかなり進んでいたためであった(詳しくは、拙稿②p39を参照のこと)。

ところが、ラ行の四段化の場合は、前述の如く、狂言本・近松浄瑠璃ともに、語によって四段化はほぼ完了、又は全くこれからという状態で、新語形である四段形は、当時の口頭語でも「シヤルル」等では語彙的に定着し、「ナサルル」等では目に付くほどの勢力を得ていなかったであろう。つまり、ラ行の四段形は近松浄瑠璃の強い反省的意識に抵触できるような新興勢力でなかったため、近松浄瑠璃は狂言本と同程度ラ行の四段形を受け入れることになったと考えられる。

従って、変化の進度でみた場合、狂言本と近松浄瑠璃とが、一段

表(5) ナ変の四段化

活用 種別	ナ変		四段	保留
	地文	会話文		
狂言本	4	42	1	3
近松浄瑠璃	9	59	4	3
洒落本	6	5	2	2

▷空欄は、用例0を示す。

四段化は殆ど進んでおらず、資料性等の検討には有効でない(別表V・表(5)参照)。

洒落本でも、まだナ変の方が優勢で、四段化が完了するのは、近世もかなり下った頃と考えられる。

四. まとめ

(1) 拙稿②に引き続いて、本稿でも活用型の変化現象を判定規準に、狂言本の資料性を検討してきた。たゞ、本稿で対象としたラ行下二段語は敬語という一般性に欠けるもので、検討できたのが会話文だけと、片手落ちの感もするが、この限りでもこれまでと同じ結果を得ることはできた。

即ち、狂言本の言語資料としての性格は、へ近世前期上方(口頭語を反映している)へ口頭語の反映度はかなり高いという二つの意味で、へ狂言本は口語的な資料と考えることができる。

(但し、内部差が存し、狂言本すべてが口頭語の反映度の点で同

じでないことは、前述の如くである。)

(2)たゞ、注意しておくべきことは、これらの結果は、あくまでも近松浄瑠璃との比較による相対的な評価にすぎないということである。上方語との関係は、他種の資料でも認められる変化の傾向性での一致などに基づくもので問題は少ないが、口頭語の反映度は、変化形の多少による一致・不一致に基づくもので、相対評価の典型と言える。

近松浄瑠璃にも非口語的な要素が幾らか存することから、従来の如くそれを口語資料として絶対視することは、危険であろう。

(2)例えば、拙稿②で述べたサ行下二段の四段化の低調さをもその一例である。

近松浄瑠璃が上方語を反映していないという訳ではないが、この点の限りでは、口語的なものの反映度は狂言本より劣ることは間違いない。

また、このことと関連するが、サ行四段動詞の下二段化という「文語めかし」の例も、近松浄瑠璃に幾らか認められた。

その他、近松浄瑠璃のサ行イ音便、形容詞シク活用終止形の「シシ」形、丁寧辞「マスル」^{注(4)}などに、その非口語的な側面を見ることのできる。

その詳細については、稿を改めたいが、これらの現象から少なくとも近松浄瑠璃のことはさへ口頭語そのまゝにさせない抑止力の存在は認めてよからう。

(2)このため、近松浄瑠璃以外のものとの比較、例えば、紀海音の浄

瑠璃との比較、更には、浄瑠璃を歌舞伎化したものの狂言本と原作の浄瑠璃との比較などが必要になってくる。

特に、後者の比較は重要で、鎌倉恵子氏が行なっていていられるが、「近世文芸」32の論文)、細かな言語現象の比較までには至っていないようである。

この比較では、同文脈での比較が可能になり、語形の違いから文体的な違いまで、かなり広汎な比較が行なえる。このため、本稿までのような口語性だけでなく、狂言本の歌舞伎語資料としての性格などまで明らかにできよう。

(3)これまで活用型の変化現象で狂言本の資料性を検討してきたが、これで概ねその口語的な側面は示しえたと思う。

しかし、この現象は、非変化形と変化形との微妙な差が唯一の弁別の特徴であるため、これによる検討は、反省的意識の行き届きにくい部分を扱うことになる。従って、これで口語性が高いと言えても、それは狂言本作者が口頭語の微妙な部分まで注意を払って写したと積極的な評価ができる反面、狂言本作者が不注意なため、口頭語を多量に混入させた、歌舞伎のことばの書きこむことばらしくする要素たりえないとして口頭語を混入させた、とも考えられる。

後者の如き口頭語の描写に消極的な態度であるなら、当然、他の言語現象になると狂言本に非口語的な面が見えてこよう。

このため、今後、いろいろな言語現象や比較資料を扱って検討を進めてゆかねばならないのである。

五、別表

※別表Ⅰ、Ⅲ 狂言本30種・近松浄瑠璃17種・洒落本14種について、個々の資料ごとにラ行下二段活用 of 四段化の狀態を統計化したもの。

※別表Ⅳ 狂言本30種・近松浄瑠璃17種・洒落本14種につき、それぞれを用例を一括して、ラ行下二段活用 of 四段化を下接すること統計化したもの。

※別表Ⅴ 狂言本30種・近松浄瑠璃17種・洒落本14種について、個々の資料ごとにナ変 of 四段化の狀態を統計化したもの。

▽いずれの表も、空欄は用例0を示す。
▽用例の偏りから、概ね会話文 of 例を主体に作表した。地文 of 例の示し方は表によって異なるが、いずれの場合も、会話文 of 例とは別立てにした。

五ノ一、別表の説明

別表はすべて活用形ごとにまとめたが、個々の用例の処理にあたっては、以下の如き点に注意した。

○別表Ⅰ、Ⅳ

▽終止連体形「ナサル」等Ⅱ四段の終止連体形とも、下二段の旧終止形とも判定し得ることがある。しかし、「ベシ(ベイ)」下接の例を除き、すべて四段の終止連体形と見做した。

表(6) 漢字表記例

活用形	未然形	連体形	命令形	その他	計
狂言本	ナサル	2	1	1	4
洒落本	下サル	4			4
頭本	ナサル	1	24	15	40

▽近松浄瑠璃にはこの例は見えない。
▽空欄は用例0を示す。

▽命令形Ⅱ語尾「ヨ・イ」の有無だけで下二段と四段とを区別した。従って、「ナサル」「メサレ」の変化形「ナサイ」(洒落本ノ例)、「ナサヘ」(洒落本ノ例)、「メサ」(近松2例)等も、「ヨ・イ」がないので、四段の例と見做した。

▽「その他」欄Ⅱ下二段と四段とで異なる活用形に付く「ナヘ禁止法」Ⅱ「マイ(マジ)」の下接例をおさめた。これらは、四段活用では終止連体形、下二段活用では未然形 of 連用形に接続する。但し、「ナ」は下二段の終止連体形に下接することもある。

▽「保留」欄Ⅱ「バ」「ベシ」下接の例をおさめた。

○「ナサレバ」等Ⅱ仮定条件法が「未然形十バ」から「已然形十バ」に繰りつある時期にあたるため、これが下二段の未然形か四段の已然形か判定が困難。

○「ナサルベシ」等Ⅱ「ベシ」の性格からすると、「旧終止形十ベシ」と考えられる(文献④p405)。

同氏『室町時代言語の研究』(p208)。
近松浄瑠璃にノ例(四宵)見える
「ベイ」もこの変化形と見做し、同様の扱いをした。

▽漢字表記例「被成ダ」等Ⅱ洒落本を中心に幾らか見えるが(表(6)参照)、これらの例はすべて除外した。この形がひとつの表記形式として確立しているため、口頭語の狀態とは無関係に文字

化に際して「被成」としてしまふことが考えられるからである。

○別表V

▽「保留」欄「ベシ」「マイ」下接の例をおさめた。「ベシ」下接については前述の如くであるが、「マイ」下接は、それが古くから常に「シヌ」「イヌ」形に付くためである(文献④p412、同氏、室町時代言語の研究、p278)。

〔注〕

(1) これらのうち、「オツシャルル」以外は、諸々の用法・語形を一括した抽象的なものである。特に、「シャルル」には、自立的用法の「サシシャルル」・附屬的用法の「サシシャルル」「シャルル」「ヤシシャルル」など、多くの形が一括してある。「ナサルル」「メサルル」「下サルル」も、同形ながら、自立的用法と附屬的用法とがまごめてある。これは、いずれの語も用法・語形ごとに四段化を見ても、有意な差が認められなかったためである。尚、用例の扱いについては、一部、五ノ一項「別表の説明」に示した。参照されたい。

(2) この外に、岸田武夫氏(「言語と文芸」p331)「京都学芸大紀要」p410)の論文、安達隆一氏(「愛知教育大研究年報」17)の論文、彦坂佳宣氏(「文芸研究」83)の論文などを参照した。
(3) 本稿で扱う敬語のうち、地文に見えるものは、次の如き一二の

語で、その用例は極めて少ない。このため、論中、特別に断らない限り、すべて会話文の用例で検討を行なっている。

▽狂言本…「ナサルル」2(512)、「下サルル」11/(244)

▽近松浄瑠璃…「下サルル」11/(162)

▽洒落本…「ナサルル」11/(159)、「下サルル」11/(22)

〔()内は、会話文での用例数。〕

尚、現在準備中のへ敬語辞の使用状況による検討のため採用了敬語辞のうち、狂言本の地文に見えるのは、8種・459例にすぎず(会話文…23種・289例)、その九割近い例(394)を非口語的な「給フ」が占めている。

(4) 特に、否定辞「ヌ」が頑なに下二段形に下接することは明らかにしえない。たゞ、推量辞「ウ」下接と「ヌ」下接とに違いが見えるのは、当時開合が乱れ、「ウ」下接によって拗長音化が生じるため、「シャルウ」と「シヤラウ」の差が、「シヤレヌ」と「シヤラヌ」の差に比べて小さく、四段化がより容易であったためと考えられる。

尚、サ行の四段化でも同じであるが、活用型の変化現象で活用形ごとに変化がまち／＼なのは、へ新しい活用への変化の力が活用形によって違つたためへ元の活用へ引き止める力が活用形によって違つたため、いずれも考えることができる。特に、未然形・連用形の場合には、右の如く、下接辞ごとにこの二つの力を考えてゆく必要がある。たゞ、その詳細については、今後の課題としたい。

狂言本30種活用形別用例数(会話文)

活用形 語	未然形	連用形	終止 連体形	已然形	命令形	計
ジャルル (%)	14 (7.6)	60 (32.6)	67 (36.4)	1 (0.5)	42 (22.8)	184 (99.9)
ナサルル (%)	25 (5.1)	329 (66.7)	73 (14.8)	0 (0)	66 (13.4)	493 (100)
メサルル (%)	1 (9.1)	1 (9.1)	1 (9.1)	0 (0)	8 (32.7)	11 (100)
下サルル (%)	7 (3.1)	100 (44.6)	20 (8.9)	1 (0.4)	96 (42.9)	224 (99.9)
オッサルル (%)	3 (5.7)	27 (50.9)	21 (39.6)	0 (0)	2 (3.8)	53 (100)
普通動詞 %	10.6	63.6	18.9	3.8	3.1	100

▷普通動詞は、「聞ク」「忘ル」「過ク」「見ル」「居ル」「死ス」「来ル」「為ル」の8語。
▷普通動詞の資料は、「雑兵物語」「昨日は今日の物語」「遊子方言」「浮世風呂」の4種。

- などを示した。近松浄瑠璃でも同じで、普通動詞のそれに比べて全般に高い。
- 尚、普通動詞のデータは、浅見徹氏の調査(『講座日本語学』3 現代文法との史的対照。p.26)を利用していただいた。
- (7) 近松浄瑠璃では、下二段、命令形は、「ナサレヨ」「下サレ」各ノ例であるが、狂言本では、12例もあって一つも「イ」の形がなく、いささか不自然な感がする。
- 文献④(ペ15)には、四段動詞の命令形に「ヨ」が付いた例が示してあるが、これに比べれば、まだ下二段活用が残っているラ行の敬語で命令形に「ヨ」を付けることくらいは、容易であり、その存在も抗抵なく受け入れられよう。
- (8) 同じ四段化が見られる使役辞「サスル」でも、一部にこれと同

- (5) 「主観的表現の語句」は、金田一彦彦氏(『国語国文』223)の論文、「詩的性格を持つ」は、大野晋氏(『国語と国文学』275)の論文による。
- (6) 表に、対象としている狂言本の敬語の活用形ごとの用例数

- (9) 筆者は、ラ行下二段の四段化は用言の中でも例の多いラ行四段動詞への類推に原因すると考えるが、この「命令形語尾ヨ、イ」の脱落は四段化への足掛りとして重要視している。従来、この外に、「動詞ナサルル」の一語化、「終止連体形語尾ル」の脱落、「一段化の遅さ」など、四段化のきっかけや条件がいろいろ言われてきたが(文献④や注②の彦坂氏の論文)、その重要度の点では、いずれも「命令形語尾の脱落」には及ばないように思われる。
- そこで、次に、筆者の考える四段化の初期段階を示しておく。
- 最初は、下二段語に一般的な命令形語尾「ヨ、イ」の脱落であったが、注⑥に示した如く、敬語では命令形の使用頻度が高いため、その過程でラ行四段への類推を強く受けるようになった。命令形の四段化が概ね完了すると、そこを足掛りとして活用形の統一化の力が働き、ラ行四段への類推と相俟って他の活用形の四段化を進めていった。

この過程で、「動詞+シルル」の一語化は、その敬語としての成立、即ち、四段化の可能性の萌芽のために必須の条件であるし、「一段化の遅さ」も、特に、終止連体形での四段化を進めるために必要な条件であったと言える。

尚、ラ行四段動詞の多さについては、色々な調査がある。

例えば、慶野正次氏の調査（『動詞の研究』、但し、本書果見のため、林大監修『図説日本語』p.393によった。）によれば、古典に現われた動詞の場合、四段動詞の中では最も多く（279例・33.8%）、全動詞の中ではサ変に次いで多い（163%）。また、著者の調査（大野晋他編『岩波古語辞典』、見出し語・複合語）でも、四段動詞の中でラ行のものが最も多かった（126例・31.3%）。

このように所屬語が多かった上に、近世前期にはラ変もラ行四段になっていたため、使用頻度の上でもラ行四段の全体に占める割合は非常に高かったと考えられる。

(10) 終止連体形における語尾「ル」の自然的な脱落を否定することはできないが、この傍証として尊敬法等の「シルル」の例をあげるのは、問題があろう。

即ち、坂梨氏の示された「シルル」の例は、「シルル」の語尾脱落形ではなく、「文語めかし」によって作られた一種の旧終止形と考えられるのである。

近松浄瑠璃の「シル」の例は、8例中5例までが「老人（女）のことば」（文献④p.52）に見えるもので、坂梨氏も「古めかしい表現にふさわしいものとして用いられている」（同p.52）と述

べていらっしやる。しかし、「シルル」が「シルル」から新たに生じた語形であるなら、俗語的・当世的なものとして、もっと別な表現に用いられそうなものである。また、へ一時代前に盛んだったが、近松の頃には、古老などのことばにしか残っていないかたとして、文献④に見える抄物・虎明本の「シル」の例は、勢力を得ていたものには見えない。

更に、狂言本でも、侍の改まった発話に見られるだけで、「シル」が当時の新しい形であったとは考えられない。

○内大臣みちなり（関白）「……につたう仕候所に、大王御きげんあそばされ、数の宝物おくりつかはさる。そのぶぎやうには、まんこしやうぐん……」
④ 穉・三才

従って、以上の点から、「シルル」は、古めかしさを出すために（特に、確認している例すべてが会話文にしか見えないことから、会話の表現を豊かにしようとして）、作り出された語形とするのが、妥当であろう。

尚、「シルル」は、文語の終止形がモデルになったのであろうが、当時、終止形と連体形とは同形であったため、「祖父忠太夫帰らる迄」（④堀）・「ゆくへをもとめさがさる由」（④寿）の如く、連体形まで旧終止形にしてしまった例が見える。

(11) すると、終止連体形でも下接辞（の語）によって四段化は異ならぬか……という疑問が出てくる。しかし、このことは、別表Ⅳに示した如く、個々の下接辞（の語）の用例が非常に少ないため、その違いによる四段化の差を求めることは不可能である。

(12) 本来ならば、こゝで次の如き先賢諸氏の御研究を参考に各々の敬語の性格・歴史を詳述した上で、以下の論を進めるべきであらうが、紙面の関係で一切省略した。

―湯沢幸吉郎『室町時代言語の研究』、徳川時代言語の研究』、江戸言葉の研究』、山崎久之『国語待遇表現体系の研究』、辻村敬樹『敬語の史的探究』、『講座国語史5』、敬語史』(特に、「近代の敬語」I・II)、岩波講座日本文語4『敬語』(特に、「敬語の変遷」)等。

(13) 「オッシャルル」の出自については、注(2)の安達氏の論文を初めとして諸説あるが、坂梨隆三氏のお考え(『講座国語史4』、文法史、ペル(48)などと同じく、「仰セラルル」出自としたい。ちなみに、坂梨氏が「仰セアル」出自とされ、「オッシャルル」の四段化に關係しているとされる(文獻⑨、58)、「オッシャルル」は、狂言本・近松浄瑠璃ともに四段活用(例)が見えない。

(14) 敬語の歴史は、敬意逓減の過程でもある。すべての敬語が活用型の変化を起す訳ではないので、四段化と敬意逓減とに密接な相関關係を考へることはできないが(但し、幾らかは四段化の進行が敬意逓減を招いてはしよう)、両者は無關係ではなく、累積的な使用頻度に左右されながら並行的に進行・逓減すると考えられる。つまり、ラ行下二段の敬語は、使われれば使われるほど、四段化は進み、敬意は低下するのである(「シヤルル」などの語形変化も、敬意の低下に無關係ではない)。このため、四段化の完了は、敬意の最低落下を意味し、敬語としての衰滅にもつながる。

ると言える。たゞ、「マス」を下接させるなどして、敬意を復原させることができれば、「ナサルル」などの如く、四段化が完了しても敬語として用いられ続けよう。

尚、へ累積的な使用頻度」という概念を、活用形間の四段化の遅速の問題に持ち込むと、命令形では都合が良いが、他の活用形になると説明ができなくなる。たゞ、この場合、注(4)で述べたように、へ元の活用へ引き止める力への存在を忘れてはならない。例えば、使用頻度の高い連用形では、四段化の力が強い反面、下接辞との結合度(一語化度)の高さなど、下二段のまゝにしておこうとする力も強いのである。

(15) 洒落本での四段化の傾向は、全体の用例が少なく、四段化の完了したものの(「シヤルル」「オッシャルル」)が存することから捉之にくい所がある。

活用形の間では、「ナサルル」「下サルル」の状態から、終止連体形・命令形と未然形・連用形との間に大きな差が認められる。これは、狂言本・近松浄瑠璃の状態から、特に、未然形・終止連体形で四段化が進んだ結果と言へる。

敬語の間では、へシヤルル、オッシャルル、下サルル、ナサルル順で四段化が進んでおり(「メサルル」は消滅寸前)、狂言本など同一の傾向を示している。

(16) のサ行イ音便については、奥村三雄氏の御指摘があり、「元禄期歌舞伎脚本の音便率は低く、近松浄瑠璃よりも、むしろ、シヤル本の場合に近い」(『国語国文』37の論文注(四))と、ペ85へ

サルル					下サルル					オッサルル					資料番号						
終連 下	止 下	命 下	その他 下	計 下	保 留	未 然 下	連 用 下	終 止 下	已 然 下	命 令 下	その他 下	計 下	保 留	未 然 下		連 用 下	終 止 下	命 令 下	その他 下	計 下	
/				/			2			/		2	/								①
	/		/	/		4	/					5									②
			/			/			/	2		2	2	10			/			/	③
							8	3		6		11	6	2							④
									/	/		2			2						⑤
							9	/		3	/	2	11	5							⑥
	/	/	/	/		4		/		8		4	9		3						⑦
	/			/		13				6		13	6		3	/					⑧
						4				3		4	3								⑨
					2	6				8		8	8		/					/	⑩
		/	2			3	/			5		4	5		/	/				2	⑪
						3				7	/	4	7		/	3	/			5	⑫
					/	7	2		/	3		11	3	/	2	6	9		/	17	⑬
	/		/	/	/	3	4			4		8	4		2	2				4	⑭
	/		/	/	2	6	/	/		2		9	3		/					/	⑮
	/	/	2			4	/					5									⑯
						5						5			/					/	⑰
	/		/						/	4		1	4	/	/	/				2	⑱
						5	/	/		6		7	6	/	/					/	⑲
						2	/			2		3	2	/	/	/				2	㉑
										/		/									㉒
						/	2			7		1	9								㉓
						/		/		3		1	4			/				/	㉔
	/		/			/				4		1	4					/		/	㉕
					/	2	/		/			4	/		3	/		/	/	1	㉖
						/	/			4		2	4								㉗
												/									㉘
								/		2		3									㉙
																	/			/	㉚

▽()内は、地文の用例数。

別表-I 狂言本30種におけるラ行下二段の四段化 (会話文)

調査資料	上演年	シャルル							ナサルル							メ							
		未然下二	然形下四	用形下四	終連下二	止体下二	已然下二	命令下四	その他下二	計下四	未然下二	然形下四	用形下四	終連下二	止体下二	命令下四	その他下二	計下四	保留	未然下二	然形下四	用形下四	
元禄	①[隈]	1688				1		1			2		12	5	2	1		19	1				
	②[織]	1688											2	1	1			4					
	③[金]	1690			3	9		3	3	18		6(0)	4	1	1	1	12(0)	1	1	1			
	④[路]	1691	1			6				1	6	1	10	4		4	2	17	4				
	⑤[連]	1695	1	1	3	3		5	1	2	12	1	13	2				16					
	⑥[江]	1698			4	7		7	1	19	1		6	2		1		9	1				
	⑦[浦]	1699	1		2	3		2	1	1	8		16			1		16	1				
	⑧[花]	1699	1		2	7		1	2	1	12	2	18	3		2	1	24	2				
	⑨[福]	1699		1	9			3		13		21(0)	5		5			26(0)	5				
	⑩[弘]	1700			5	3		1	1	10	2	19	2		1	1		24	1				
	⑪[奈]	1701			1	2		1		4		8	2			3		13	1		1		
	⑫[新]	1701	2		1	1		3	2	5	2	11	3		3	1		17	3				
	⑬[壬]	1702	1	1	13	8	1	1	1	1	25	3	41	8		2		52	2				
	⑭[女]	1702	1		4	7				1	11	3	20	2		2		25	2				
	⑮[秋]	1702	1		2	3		3	1	8	2	20	4		6			26	6				
宝永	⑯[白]	1704	1						1			8	4				12	1					
	⑰[元]	1706			1				1		1	2					3						
	⑱[蔽]	1709				1	1		1	1	2	1	1	1			4	1	1				
	⑲[竹]	1710	1		3	3		4	1	10	2	30	6		9	1		39	9				
正徳	⑳[柏]	1713					1		1		12	1		8	2		15	8	1				
	㉑[鐘]	1715	1						1	1	9	2		4	2		14	4					
享保	㉒[金帛]	1716			1		1		2	1	17	3		4			21	4					
	㉓[夫]	1716				1			1	1	2	1		1			4	1					
	㉔[忌]	1718			2	1		3		6	1	2					3						
	㉕[成]	1719			3	1		1		5	2	16	3		2		23						
	㉖[日]	1720							1	1	4	2		2	1		7	2					
	㉗[津]	1721										1		1			1	1					
	㉘[筑]	1725																					
	㉙[帳]	1728										1			1		1	1					
㉚[見]	1729																						

メサルル					下サルル					オッサルル					資料番号 保留							
連用形	終止	連体形	命令形	その他	計	未然形	連用形	終止	連体形	已然形	命令形	その他	計	保留		連用形	終止	連体形	その他	計	保留	
下二	下四	下二	下四	下二	下四	下二	下四	下二	下四	下二	下四	下二	下四	下二		下二	下二	下四	下二	下四	下二	下四
											/			/								(1)
	/				/ 2								2									(2)
	/				/ /	/				/ 2	/	4	2									(3)
				/ / / /	/					4		1	4									(4)
							2			4	/	7			/ /			/ /				(5)
			2		2			/		8	/	10			/		/		/ /			(6)
	/		/		2	/	2			6		1	8	/								(7)
						/	/			7	/	1	9									(8)
							5			3	/	5	4									(9)
			/		/ /	3	2			9	/	5	10	/								(10)
	/				/	4		/		6		5	6	2			/		/ /			(11)
			4	/	5	4		/		9	/	5	10		/		/ /		2	/		(12)
	/				/		/			6	/ / /	8										(13)
			/ /		/ / /	2	/			6	/	4	7					2	2			(14)
						/				4	/	1	5									(15)
	/				/	/ / /	2			18	/	2	22									(16)
2			/		3 /	2 (1)				6		2 (1)	6 (1)									(17)

▽()内は、
地文の用例数。

別表-II 近松浄瑠璃17種におけるラ行下二段の四段化(会話文)

	調査資料	上演年	シャルル							ナサルル										
			未然形	連用形	終止連体形	命令形	その他	計	保留	未然形	連用形	終止連体形	已然形	命令形	その他	計	保留	未然形		
			下四	下四	下四	下四	下四	下四	下四	下四	下四	下四	下四	下四	下四	下四	下四	下四	下四	
元禄	(1)[曾]	1703									1									
宝永	(2)[紅]	1706					2	1	3	3	3	3	1	1	3		8	3		
	(3)[堀]	1707						1	1	2	6	2			2	1	11	2		
	(4)[五]	1707				1	2		3	1	7				2		8	2	1	
	(5)[重]	1707	1				1		1	1		6			1	4	1	8	4	
	(6)[丹]	1708					4		4		5	3				1	9			
	(7)[万]	1710	1	2	5	5	2	15	3	3	6	2			2		11	2		
	正徳	(8)[冥]	1711				1	3		4		1	1					2		
(9)[今]		1711					4	1	1	4		7	1		2	1	9	2		
(10)[夕]		1712	1				1		1	1	3	7	4		1	1	15	1	1	
(11)[大]		1715				1			2	3	2	9	1		5	1	13	5		
享保	(12)[権]	1717				3			3	1	5	4	1		4	1	11	4	1	
	(13)[寿]	1718		1	1				2	1	1	4	2		1	2	10	1		
	(14)[博]	1718		1	1	6			8	1	1	2			6		3	6		
	(15)[網]	1720					2	2	4	4	7				1	1	12	1		
	(16)[油]	1721				1	6	1	8	1	5	1	4		5		10	6		
	(17)[宵]	1722		1			6		7	4	7	3			1		14	1	1	

別表-III 上方板酒落本14種におけるラ行下二段の四段化 (会話文)

調査資料	刊年	シャルル				ナサルル						メサルル 保留	下サルル				オッシャルル								
		未然形	連用形	命令形	計	未然形	連用形	終止形	命令形	その他	計		未然形	連用形	命令形	計	未然形	連用形	終止形	計					
		下二四	下二四	下二四	下二四	下二四	下二四	下二四	下二四	下二四	下二四		下二四	下二四	下二四	下二四	下二四	下二四	下二四	下二四					
宝 曆	㊦[穿]	1756						1		1		2					2	2	4						
	㊦[清]	1756		1	4	5	2	4	5	2	1	7	㊦	14			4	2	6		1				1
	㊦[月]	1757 頃						1	2	1	1		5	1		2			2				4		4
	㊦[陽]	1757		1	2	3					2		2			1			1				1		1
	㊦[新]	1757														1			1			1			1
	㊦[聖]	1757			1	1	2	5	3	1			7	4											
明和	㊦[享]	1771 頃		1		1		3		2		3	2		1	㊦	5	㊦	5	㊦		1	2		3
安永	㊦[風]	1779					1	1		5		1	6			1		1							
天明	㊦[短]	1786					1	5	10	1		17									1				1
寛 政	㊦[碎]	1794	1			1	4	4	5	15		28													
	㊦[北]	1794						1	2	1		3													
	㊦[う]	1797		1		1	1	6	10	1	5	7	16	1		1		1							
	㊦[十]	1798					2	7	6	11	1	27											1		1
	㊦[阿]	1798						1	3		2	1	5												

▷()内は、地文の用例数。

別表・IV

〔狂言本〕

①シャルル

未下ニ¹² (ヌ¹¹・ウ¹)

四² (ウ²)

用下ニ¹ (マス¹)

終四⁵⁹ (タ³⁵・マス¹²・テ¹²)

四⁵⁹ (体言¹²・ソ⁷・カ⁴・ノ⁸へ輕

い疑問³・ガ²・ハ²・ニ⁸

2・故²・サ¹⁰・ナ¹・ナ¹・

ガ¹・ト¹・通¹・サ¹・カ¹・

テ¹・様¹・なし²⁵)

已四¹ (ドモ¹)

命下ニ¹

他四⁴¹ (ナ⁸・マイ³)

②ナサルル

未下ニ²⁵ (ヌ¹⁵・ウ⁹・シ¹)

用下ニ³²¹ (マス²⁴・タ⁸⁰・中止法⁵⁰・テ

48・シ¹⁵・用言⁶下サルル⁴・

候¹・フ¹・5・ナ²・タ¹・

ヤ¹・ウ¹・サ¹・ナ¹)

終下ニ⁷³ (体言¹⁴・ト⁶・ハ⁶・ナ⁶・

ガ³・カ³・デア¹ル³・故³・

様²・ユ¹・ト¹・モ¹・通¹・リ¹・

ソ¹・様²・ニ¹・ニ¹・ヨ¹・ニ¹・ツ

キ¹・ニ¹・ハ¹・なし¹⁹)

命下ニ⁵

四⁶⁰

他下ニ¹⁷ (ナ¹²・マイ⁴・マ¹・ジ¹)

保 5 (ベシ³・バ²)

へ地文¹

用下ニ² (ケ¹ル¹・中¹止¹法¹)

③メサルル

未下ニ¹ (ズ¹)

用下ニ¹ (シ¹)

終下ニ¹ (ナ¹)

命下ニ¹

四⁷

他下ニ² (ナ²)

四¹ (ナ¹)

保 / (ベシ¹)

④下サルル

未下ニ⁷ (ウ⁵・ヌ²)

用下ニ⁹⁶ (マス⁷⁸・タ⁷・ナ⁶・中¹止

法³・用言⁸候²)

終下ニ¹⁷ (ナ⁵・体言³・カ³・ナ³・

ト¹・ニ¹・故¹)

四³ (カ¹・なし²)

已下ニ¹ (バ¹)

命下ニ⁵

四⁹¹

他下ニ³ (マイ²・ナ¹)

四² (ナ²)

保 15 (ベシ¹⁵)

へ地文¹

用下ニ¹ (中¹止¹法¹)

⑤オツシャルル

未下ニ¹ (ヌ¹)

四² (ヌ¹・ウ¹)

用四²⁷ (タ¹²・マス¹¹・テ⁴)

終四²¹ (ハ²・ニ⁸・ト²・ニ¹・ヨ¹・

テ¹・故¹・サ¹・ウ¹・通¹・リ¹・

モ¹へ終助詞¹・なし¹⁰)

命四²

他下ニ¹ (マイ¹)

四¹ (マイ¹)

〔近松瑠璃〕

①シャルル

未下ニ² (ヌ²)

四¹ (バ¹)

用四⁵ (タ³・マス¹・ンス¹)

終四¹⁴ (ハ²・ヤ¹・カ¹・ソ¹・

ト¹・通¹・リ¹・なし⁷)

命四⁴²

他下ニ¹ (ナ¹)

四⁹ (ナ⁹)

保 2 (バ²)

②ナサルル

未下ニ²⁵ (ヌ¹⁶・ウ⁶・シ²・イ¹・デ¹・

用下ニ⁸⁵ (タ²⁶・マス²³・テ¹⁰・中¹止¹法

10・用言⁶下サルル⁷・下¹ス¹・

8・シ⁴・ヤ³・ナ¹)

四¹ (ンス¹)

終下ニ³⁰ (体言⁹・ナ⁴・ト³・カ³・

ハ²・ト¹・ノ¹・ガ¹・故¹・ジ¹・

ヤ¹・なし⁵)

已下ニ⁴ (バ³・ド¹)

命下ニ¹

四³⁹

他下ニ¹⁰ (マイ⁷・ナ³)

保 2 (ベシ¹・ベ¹)

③メサルル

未下ニ³ (ウ³)

用下ニ² (タ¹・ヤ¹)

四⁵ (タ⁵)

終下ニ¹ (なし¹)

命四¹⁰

他下ニ¹ (ナ¹)

四² (ナ²)

④下サルル

未下ニ⁵ (ヌ²・ウ²・シ¹)

用下ニ²⁵ (マス⁹・タ⁸・シ³・テ²・

中¹止¹法¹・ナ¹)

四⁴ (マス²・タ¹・ヤ¹・ヌ¹)

終下ニ⁴ (体言³・なし¹)

四⁷ (体言³・カ²・ハ¹・なし¹)

已下ニ¹ (バ¹)

命下ニ¹

四⁹⁹

他下ニ³ (ナ³)

四⁹ (ナ⁹)

保 4 (バ³・ベシ¹)

へ地文¹

用下ニ¹ (テ¹)

⑤オツシャルル

用下ニ² (タ¹・テ¹)

終下ニ¹ (なし¹)

四⁴ (体言¹・カ¹・なし²)

他下ニ¹ (ナ¹)

四² (ナ²)

保 / (バ¹)

〔酒落茶〕

①シャルル

未四¹ (ヌ¹)

用四⁴ (タ³・テ¹)

命四⁷

②ナサルル

未下ニ⁵ (ヌ³・ウ²)

四¹³ (ヌ¹⁰・ナン¹・イ¹・デ¹・

ウ¹)

用下ニ²² (マス¹⁰・テ⁹・タ⁵)

四³⁹ (タ¹⁹・マス¹³・テ⁷)

終四・25(カ5・ニ2・体言7・通リノ)

シノ・デアルノ・ヤラノ・トノ
ヨツテノ・ノジヤノ・ワイナノ
なし9)

命四・53

他四ノ(ナノ)
ノ(バノ)

保

他下二ノ(マジラン)

③×サル

命四ノ

④下サル

未下二ノ(ヌノ)

用上・3(マス2・タノ)

四・14(マス13・タノ)

命四・4

へ地文

用下二ノ(中止法ノ)

命四・2

⑤オツシャルル

未四ノ(スノ)

用四・3(テ3)

終四・8(ヤラ3・ゾノ・トノ・サカイ
ゾノ・なし2)

※この表で、「ハ、シャルル」未下二12
(ヌリ・ウノ)とあるのは、次の如き意
味である。会話文の「シャルル」の例で、
未然形の下二程活用ものが2例あり、そ
の下接辞は、「ヌ」が1例、「ウレガノ」例
ある。

※原則として、会話文の用例を示したが、地
文の用例を持つものは、へ地文以下欄
に示した。

※活用形の並べ方は他の別表と同じで、未・
用・終・已・命・他・保は、それぞれ未然
連用・終止連体・已然・命令・その他・保
留を意味する。

※下接辞のうち活用を持つものは、活用形の
区別は示さず、すべてその終止連体形を代
表させた。

※終止連体形の欄の「なし」とは、下接辞を
全く有さない終止法の例を意味する。

別表・V

【狂言末】

①腰(一六八八)

会・終・シヌルノ(トノ)

②腰(一六九一)

会・終・シヌルノ(トノ)

③腰(一六九五)

会・終・シヌルノ(体言ノ)

④腰(一六九八)

会・終・シヌルル6(ト2・体言ノ・な
し3)

⑤浦(一六九九)

会・終・シヌルル2(ゾノ・なしノ)

已・イヌルル2(バ2)

⑥池(一六九九)

会・終・シヌルル(なしノ)

⑦窟(一六九九)

会・終・シヌルル5(デゴザル2・デ
ザンスノ・デアルノ・なしノ)

保・シヌルノ(マイノ)

イヌルノ(マイノ)

⑧釜(一七〇一)

会・終・シヌルルノ(ニモノ)

⑨新(一七〇一)

会・已・シヌルルノ(バノ)

⑩空(一七〇二)

会・終・シヌルル6(ト2・体言ノ・な
し3)

⑪空(一七〇三)

地・終・シヌルルノ(トノ)

⑫空(一七〇三)

会・終・シヌルル3(程ノ・ゾノ・なし
ノ)

⑬空(一七〇三)

会・終・シヌルル3(体言2・なしノ)

⑭白(一七〇四)

会・終・シヌルルノ(体言ノ)

⑮定(一七〇六)

地・終・シヌルル2(ヲノ・バカリノ)

⑯空(一七〇六)

会・終・シヌルルノ(ゾノ)

イヌルルノ(カノ)

⑰空(一七〇六)

已・シヌルルノ(バノ)

⑱空(一七〇三)

会・終・シヌルルノ(トノ)

⑲空(一七〇六)

地・已・シヌルルノ(バノ)

会・終・シヌルル2(ニノ・程2ノ)

⑳白(一七〇二)

会・終・シヌルル3(体言ノ・なし2)

㉑空(一七二五)

会・保・シヌルノ(ベシノ)

テモノ・ゾノ・なしノ)

保・シヌルノ(マイノ)

㉒紅(一七〇六)

地・終・シヌルル2(体言ノ・なしノ)

会・終・シヌルルノ(体言ノ)

シヌルノ(ナラノ)

㉓壺(一七〇七)

会・終・シヌルルノ(ハナフへ終助詞ノ)

㉔五(一七〇七)

会・終・シヌルル2(マテノ・なしノ)

シヌルノ(トモノ)

㉕量(一七〇七)

会・終・シヌルルノ(体言ノ)

保・シヌルノ(マイノ)

㉖丹(一七〇八)

会・終・シヌルル6(体言5・ガノ)

㉗空(一七〇二)

地・終・シヌルル2(体言ノ・ヨリノ)

会・終・シヌルル3(体言2・ナノ)

㉘量(一七二一)

会・終・シヌルル2(トノ・トモノ)

已・シヌルルノ(バノ)

㉙空(一七二一)

地・終・シヌルルノ(体言ノ)

イヌルルノ(体言ノ)

会・終・シヌルル5(ガノ・トモノ・ニ
ノ・ハノ・程ノ)

㉚空(一七二二)

会・終・シヌルル3(体言2・ワイナフ
へ終助詞ノ)

㉛人(一七二五)

会・終・シヌルルノ(体言ノ)

㉜壺(一七二七)

会・終・シヌルルノ(体言ノ)

- 会・保・シヌルノ(ベシノ)
 ②(一七二八)
 地・終・シヌルノ2(体言ノ・カノ)
 会・終・シヌルノ2(マデノ・ノノ)
 已・シヌルノ(バノ)
 ③(一七二六)
 会・終・シヌルノ3(体言2・トモノ)
 ④(一七二〇)
 地・終・シヌルノ(体言ノ)
 会・終・シヌルノ10(体言4・ニ2・ハ
 ノ・トモノ・トノ・ゾノ)
 イヌルノ(なしノ)
 シヌルノ(なしノ)
 已・シヌルノ2(バ2)
 ⑤(一七二二)
 会・終・シヌルノ(ニモノノ)
 イヌルノ(ナラノ)
 ⑥(一七二二)
 会・終・シヌルノ4(体言3・ハノ)
 シヌルノ(ハノ)

〔源流本〕

- ⑦(一七五七)
 地・終・シヌルノ(なしノ)
 ⑧(一七五七)
 地・終・シヌルノ(なしノ)
 ⑨(一七五七)
 地・終・シヌルノ(体言ノ)
 会・終・シヌルノ(体言ノ)
 ⑩(一七七一頃)
 地・已・シヌルノ(バノ)
 会・終・イヌルノ2(体言ノ・カノ)
 ⑪(一七七九)
 地・終・イヌルノ(なしノ)

⑫(一七九四)

- 地・終・イヌルノ(なしノ)
 会・終・シヌルノ(シノ)
 ⑬(一七九七)
 会・終・イヌルノ(ガノ)
 ⑭(一七九八)
 地・終・イヌルノ(なしノ)
 イヌルノ(ヲノ)
 会・終・イヌルノ2(ノジャノ・なしノ)

※この表で、「会・終・シヌルノ2(ゾノ・なしノ)」とあるのは、次の如き意味である。会話文に終止連体形の変「シヌル」が2例あり、その下接辞は、「ムレガノ例」何れ付かない終止法が例ある。

※地・会及び終・已・保は、それぞれ地文・会話文と終止連体形・已然形・保留を意味する。

※下接辞のうち活用を持つものは、活用形の区別は示さず、すべてその終止連体形で代表させた。

※終止連体形の欄の「なし」とは、下接辞を全く有さない終止法の例を意味する。

↓p77より注(続き) 狂言本の方が近松浄瑠璃よりサ行イ音便が少ない旨を述べていらつしやる。事実、狂言本には「サイヲ」以外見られないが、当時はこの音便の衰退期であったことから、近松浄瑠璃が古形のイ音便を多く保存していることと見ることもできる。この考えに都合よいことであるが、坂梨隆三氏は、近松浄瑠璃におけるサ行イ音便の現われ方から、それは「当時の口語よりはやや古いイメーシを感じせしめるものであつたものか」(『講座国語史』・文法史、p48)と、イ音便を絶対的な口語形とは見ていらつしやるようである。

②口語形「シイ」を基に作られた終止形「シシ」については、まだ詳しい調査を行なっていないが、確認分の限りでは、言語量が少ない割に近松浄瑠璃に「シシ」形が多い(狂言本2例・近松浄瑠璃14例)。

③近松浄瑠璃における丁寧辞「マスル」と「マス」の使い分けは、韻律(五七の音数律)によっているという坂口至氏の御指摘がある(『文献探究』10の論文)。すると、①②などは問題の所在が異なってくるが、古形「マスル」の出現率が近松浄瑠璃で高いことは事実である。

その他、注(6)で述べた「シル」形もこれらと同傾向の例である。

(一九八三・三・七)